

やま の ぼう ちょう  
山 之 坊 町

村で花火会や能芝居も

大和三山・耳成山の南東ふもとに位置する町です。古事記・応神段に「山部(やまべ)山守部(やまもりべ)を定め給う」とあり古代に「山部」と呼んだようです。山部が「ヤマノベ」から「ヤマノボ」に転じ、やがて「山之坊」の地名が生まれたものと考えられています。

平安時代以降の中世には、古文書に専ら「山坊」と書き残されています。中世末期から「山之坊」と書かれはじめて江戸時代に入り「山之坊村」となります。

山之坊と隣の石原田や膳夫(かしわで)などの一帯は、桜井市から西へ向かう初瀬街道の沿道集落として栄えました。江戸時代前期の天和二(一六八二)年に耳成山の帰属について、西ふもと木原村との間で争い(山論)がありその結果、山頂から東側の支配権が山之坊村に認められています(木原平田家文書)。村でこのころ花火会や能芝居が開かれたほか、幕末の「ええじゃないか」騒動のとき村中が昼夜踊りあかしたという、古い記録も残っています。

明治二二年に耳成村の大字となったあと、昭和三二年二月に檀原市の大字となり同年一〇月に「檀原市山之坊町」となりました。